

『地域生活定着支援センター実践事例集』

正誤表

該当 頁数	該当 箇所	誤	正
p.30	勾留期間	11/23～12/3	1/21～2/9
p.61	公判日	5/4(初公判)	12/2
	判決日	5/28	翌年 1/21
p.76		一般調整	特別調整
	障害支援区分	無	区分 3
p.84		一般調整	特別調整
	手帳	精神申請中	精神 2 級（コーディネート中に取得）
	障害支援区分	精神 2 級	区分 3
p.94	考察	<p>・困難ケースだからこそ、困っていることや対応しかねることを関係者がそれぞれ共有することで、一つの機関のみが、負担を感じることなく、全体で対応策を考えることができた。</p> <p>・少年院側も、少年の社会復帰を円滑に勧めていきたいとの思いが強く、本人面談時に、少年院内での本人の様子や指導内容の共有を積極的に行ってくれた。そのため、定着が、行政や受け入れ施設と調整する際に、受け皿の地域の方から出てきた疑問等に対しても、少年院内での様子を説明することができ、支援に理解を得ることができた。</p>	<p>■課題点</p> <p>① 実父（家族）、他者との適切な関係性を結ぶことが困難。</p> <p>② 障害受容・理解が難しい。</p> <p>③ 養育環境に恵まれず（平均的な）年齢相応な生活スキルを積むことができていない。</p> <p>④ 自閉スペクトラム障害の支援先としての社会資源が少ない。</p> <p>■工夫した点・うまくいった点</p> <p>① 少年院における障害受容への取組を関係機関に引き継ぎしたため、支援体制構築がスムーズであった。本人の障害理解が進み、社会生活への適応につながっている。</p> <p>② 少年院在院中の体験、見学は、その実施の範囲において限界がある。その中で、少年院、見学先が実施に向けて、可能な限り、時間を確保してくれた。短い時間ではあったが、本人はもとより、見学先である受入側にとっても重要なプロセスであった。</p> <p>③ 障害特性に理解のある支援機関（人）を得て、地域での生活をスタートした。そこを基盤とし、支援者だけでなく、地域の中で様々な人に出会い、社会経験を積むことができた。GH では、地域の祭りにも参加。スポーツセンター（ジム）にも通い、共通の趣味の仲間もできた。表情も豊かになり、声を出して笑うようになった。父親はじめ、他者との間に一定の距離感を持ち、困り事も相談できるようになった。</p> <p>④ 通信制高校への復学を果たし、卒業。本人の自信になった。デイケアでスケジュールを、GH で学習をサポートした。</p> <p>⑤ 定着は実父との連絡窓口を担当。本人と定期的に面接を実施。実父、本人の心情や意向を関係者会議に反映するよう支援。実父は、本人の成長に連</p>

『地域生活定着支援センター実践事例集』

正誤表

			<p>動し、精神的にも経済的にも安定の兆しが見える。</p> <p>⑥ 調整中から関係機関相互に忌憚のない意見交換を実施。互いの立場を理解することに努め、連携できた。</p> <p>⑦ 主導する機関は、本人のライフステージ（時期）に併せて交代している。定着⇒デイケア⇒作業所と推移。対等性が担保され、情報共有（管理）がタイムリーになされており、よりよい支援環境が醸成されていると実感する。</p>
p.105	ジェノグラム説明	<p>両親と祖父母は離島 B にて同居。</p> <p>長姉と長兄は就職や進学で県外在住。</p> <p>家族関係は良好だが、両親は本人への養育に自信を失っている。</p>	<p>母方祖父と母は世帯分離して同居、県内在住。</p> <p>父は疎遠だが、母の生活保護担当が連絡可能。</p> <p>長兄は養護施設退所後、単身生活。県内在住。</p> <p>長姉は結婚して県外にいたが本人収容中に自殺。</p>
P.114	罪名	強姦（強制性交等罪）	現住建造物等放火、現住建造物等放火未遂
	刑期	懲役 4 年	懲役 15 年
	入所度数	初入	累 4 入
p.139	ジェノグラム	<p>21 歳 結婚 35 歳 離婚 63 歳頃 結婚・離婚</p>	<p>21 歳 結婚 35 歳 離婚 63 歳頃 結婚・離婚</p>
p.143	IQ 相当値	77	53
	種別	高齢	障害（知的）
	手帳	無	療育手帳(B-1)
	入所度数	初入	累 2 入
p.151	相談時年齢	67 歳	35 歳